

GIVENCHY

PARIS

MARCH 7th 2025 – PARIS

GIVENCHY FALL-WINTER 2025 WOMEN'S READY-TO-WEAR COLLECTION

「前へ進むためには、原点に立ち戻る必要がある。
私にとってはアトリエがすべて。アトリエは、ジバンシィの心臓であり魂なのです」
サラ・バートン



ジバンシィの最初のメゾンであるアルフレッド・ド・ヴィニー通り8番地に建つ邸宅の改装中、隠し戸棚の中からユベール・ド・ジバンシィのパターンが発見されました。茶封筒に入れられたそれらは、1952年に発表された彼のデビューコレクションで使用したキャリコ（綿織物）のパターンであり、アトリエに集まった観客の前で初めて披露されたものだったのです。

この発見は、サラ・バートンにとって自身のクリエイションへの直感的なつながりを呼び起こすものでした。ストックマン（マネキン）での作業、フィッティング、スタジオとアトリエを行き来するプロセス。そして彼女のアーティストリック・ディレクターとしての初コレクションは、ジバンシィの歴史的な本拠地であるジョルジュ・サンク通り3番地において、一切の無駄を削ぎ落して発表されました。

「私にとって、パターンカッティングやクラフツマンシップに立ち戻るのは本能的なもの。カット、シルエット、プロポーション – それが私の感覚であり、クリエイションの本質です」

“GIVENCHY 1952”と刻印されたストックマンから始まる彼女のコレクションのリズムは、テーラリングを軸に、男性的な技術と女性らしいシルエットが融合し、対照的に表現されています。シンプルで美しいサロンの空間で、力強く洗練された女性像が再構築され、あらゆる角度からその魅力を解放するのです。

「私は、現代の女性のすべてを表現したい。強さ、繊細さ、感情的知性、パワフルであること、そしてセクシーであること – そのすべてを」

GIVENCHY

PARIS

MARCH 7th 2025 – PARIS

GIVENCHY FALL-WINTER 2025 WOMEN'S READY-TO-WEAR COLLECTION



モダンなクチュールの精緻なシルエットには、象徴的な要素と空気感が宿ります。力強いショルダーとウエストを強調するジャケットやコート、洗練された2種類のトラウザーは、スタジオで行われていた自由なフォルムの実験と対をなしています。布地がそのまま背中を大胆に見せるドレスや、結びのあるスカートに変化します。覆い隠された前面と背中の開きは女性的なセクシュアリティをもたらし、黒のレザーペンシルスカートの後ろに施されたスリットが、視線を強烈に引き寄せます。

ユベール・ド・ジバンシィのエッセンスは、単なる再現ではなく、モダンな視点で再解釈されています。シャンテリーレースのドレスはマイクロミニ丈にカットされ、ボディラインを引き立てます。50年代のバレットブラは、挑発的なアプローチへと昇華。ブレスレット丈のスリーブ、コクーンバックのシルエットはコートやジャケットに落とし込まれています。彼の象徴的なスカーフやリボン、グラフィカルなレザーのスカーフやノット、オーガンザのエアリーなネックラインに変換され、ジバンシィの象徴である白いシャツは、ドレスとして新たな命を吹き込まれています。過去のオートクチュールの価値と未来の創造的エネルギーが、ここに交差し、融合しているのです。

靴、ジュエリー、バッグは、単なるアイテムではなく、欲望をかきたてるオブジェとしてデザインされています。クチュールのエッセンスを具現化したチュールのフリルミュール、ねじれたりリボンのサンダル、曲線的なコーンヒールのフェティッシュなパンプス、裸足のようなカットアウェイが施されたサテンストラップのヒール、バレリーナフラットシューズ。エナメルレザーのスクエアトゥローファーとマスキュリンなラウンドトゥのスリッパはテーラリングに合わせ、ハイヒールのラテックススライストゥのブーツは、バックジッパーでふくらはぎにぴったりとフィットします。

バッグは『The Pinch (ピンチ)』と『The Facet (ファセット)』の2つのスタイルで展開され、クラッチやショルダーバッグの形で登場。ジュエルやマイクロメタルのイブニングクラッチが、コレクションに洗練されたアクセントを加えます。

そして、再発見されたジバンシィのパターンの物語から生まれた「大切に受け継がれるオブジェ」という概念は、アクセサリーにも息づいています。砕かれたシャンデリアのジュエリー、オールドクチュールのガラス、パール、クリスタルの煌めきが、現代的でグラマーな輝きを放ちます。